

母語での漢字使用の有無は機能動詞結合の習得に違いを生ずるか —日本語学習者の作文における産出使用を対象に—

岡嶋 裕子

要旨

「散歩」「迷惑」のような事態を表す名詞を動詞として用いるためには、「散歩する」の「する」、「迷惑をかける」の「かける」のような機能動詞と結合することが必要である。事態性名詞と機能動詞が結び付いたものを機能動詞結合というが、その結び付きは慣用的で規則性がなく、日本語学習者にとって、習得は困難である。

事態性名詞の多くは漢語であるため、漢字を用いる中国語を母語とする学習者 (Chinese learners of Japanese : 以下 CLJ) は母語で漢字を用いない学習者 (以下、「非漢字学習者」と比べ、機能動詞結合の習得において有利に思われる。作文コーパスで使用された機能動詞結合を比較分析した結果、CLJ は非漢字学習者に比べ著しく多くの機能動詞結合を用いていた。しかし、非漢字学習者も事態性名詞に多くの漢語を用い、また使用漢語の難易度も CLJ と変わらなかった。運用における誤用を見ると、両者に共通していたのは、日本語にない事態性名詞と機能動詞の組み合わせ、機能動詞結合への不適切な修飾という誤用だった。一方、日本語にない母語の借用、動詞抜きの手態性名詞の直接活用、心理表現における不適切な受け身形という誤用は CLJ にしかみられなかった。

キーワード : 機能動詞結合, 日本語学習者, 母語での漢字使用の有無, 作文コーパス

1. はじめに

動詞と同じく動作、状態、現象を指し示す名詞を手態性名詞といい、漢語サ変動詞もその中に含まれる。日本語の中で漢語サ変動詞は大きな割合を占め、日本語で意図することを表現するためには、多くの漢語サ変動詞の使用が必要である。特に、日本語能力レベルが中上級以上になり、日本語を用いる対象範囲が日常会話だけでなく、政治経済、社会、科学などに及ぶようになると、大量の漢語サ変動詞を習得することが必須となる。

事態性名詞を文中で動詞として用いるためには、動詞「する」(以下「スル (動詞) 」) と結合することが多い。しかし、全ての事態性名詞がスル動詞と結合できるわけではない。例えば、「散歩」「攻撃」などはスル動詞と結合し、「散歩する」「攻撃する」と言えるが、「打撃」「関心」などは、「*¹打撃する」「*関心する」とは言えず、動詞として用

いるためには、それぞれ「与える」「持つ」などの動詞を用いて「打撃を与える」「関心を持つ」などとしなければならない。

またスル動詞と結合可能な事態性名詞でも、文脈によってはスル動詞を用いると日本語として不自然になる場合がある。

*村上春樹の作品は、私に大きく影響した。

*アメリカの大統領選挙に、全世界が注意している。

この場合は、スル動詞の代わりに「与える」「向ける」を用いると適切になる。

・村上春樹の作品は、私に大きな影響を与えた。

・アメリカの大統領選挙に、全世界が注意を向けている。

事態性名詞を動詞として機能させるために用いる「する」「与える」「受ける」などの動詞を機能動詞とよび、事態性名詞と機能動詞が結び付いたものを機能動詞結合という。機能動詞結合を構成する事態性名詞には、連用形名詞 (ex. 「疑い」「引越し」) や外来語 (ex. 「ドライブ」「ロック」) もあるが、二字漢語が圧倒的に多い。漢字を用いる中国語を母語とする学習者は、日中で共通する漢語が多いため、日本語の漢語の習得において非漢字学習者より有利であることは、日本語教育の現場で日頃体験されることである。しかし、そのことが機能動詞結合の習得にも影響を与えるだろうか。

本稿では、日本語教育に役立てることを目的に、母語での漢字使用の有無が機能動詞結合の習得に違いを生ずるのか、違いがあるとすればそれは何かを調査分析する。

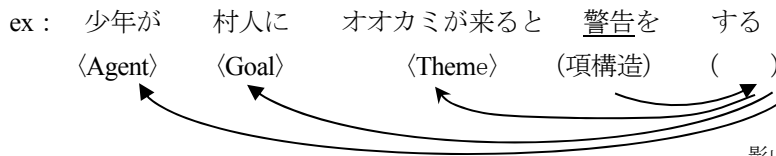
2. 先行研究

村木 (1991) は、機能動詞とは「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞」であり、名詞に託された、行為・過程・状態・現象などの側面を特徴づけると述べている。村木は、このような機能動詞結合の特徴として「結合のつよさ」を挙げているが、それは、「動詞の意味が希薄で、むすびつく相手の名詞に依存する度合いがつよ」いためである (p.222)。しかし、機能動詞結合の固定性は慣用句ほど強くはなく、「慣用句と自由な語結合の中間形態である」とする (村木、1985)。

村木は、機能動詞結合の文法的意味として、ヴォイス的、アスペクト的、ムード的な意味をあげ、これらの意味によって機能動詞を網羅的に分類し、提示している。ヴォイス的な意味を担う機能動詞は、「受ける」「与える」「もたらす」などであり、アスペクト的な意味を担うのは「はじめる」「おわる」「つづける」など、そしてムード的な意味を担うのは、「はかる」「くわだてる」などである。

影山 (1993) は Grimshaw & Mester (1988) に基づき、「VN²をする」構文に現れるスルは形式動詞であり、この構文の意味は事態性名詞 (次頁例の「警告」) によって規定されるとする。格助詞で表わされる名詞句は、それが現れる文の本動詞と文法関係を結ぶのが普通であるが、「VN をする」構文では構文上はスルの目的語として表出している事

態性名詞が文中の項の文法関係を規定している。下の例の矢印のように、事態性名詞の項構造はすべてスルにいったん受け継がれ、そこから各々の名詞句に付与される。



影山 (1993) を改作

Grimshaw & Mester (1988)、影山 (1993)、長谷川 (1999) はスルについてのみ分析しているが、Matsumoto (1996) は、「始める」「試みる」「許す」など、「する」と同じ現象を示す多くの動詞が存在すると述べている。

藤井・上垣 (2008) は、スルのみならず、支援動詞を含むすべての機能動詞結合において、事態性名詞がそれと接続する機能動詞と項を共有していることが機能動詞結合の顕著な特徴であるとして、それに基づいた判別テストを提示している。(3.2 参照)

日本語教育で機能動詞結合を扱った研究は、管見の限り鈴木 (2009) と庵 (2010) だけである。鈴木は上級日本語学習者の作文コーパスを用いて、スル動詞に関わるコロケーション誤用について分析し、コロケーションの結びつきを誤っている「結びつきの誤用」(ex. 「*質問をやらないでください」) とコロケーションの結びつきは正しいが文脈を見ると誤用である「文脈上の誤用」(ex. 「*両親思いの返事がしてきた」) とがあり、また類義語や類義のコロケーションを混同しているもの (ex. 「*日本語を専攻としていた」: 「専門としていた」と「専攻していた」の混同) が多かったと報告している。

庵は、中国語を母語とする日本語学習者の漢語サ変動詞における非対格自動詞の習得を調査した。日中同形同義動名詞を用いた文で、空所内に「し、させ、され」のいずれを入れるか、日本語母語話者と学習者を対象に、アンケートを取った。その結果、非対格自動詞の場合、母語話者は概ね「される」とは結合しないと回答したのに対して、学習者は「される」と結合すると回答する傾向があり、違いが見られたと報告している。

英語教育の分野では、Miyakoshi (2009) が名詞と軽動詞³のワード・ペアの習得を調査している。日本人学習者を対象に空所補充テストを行った結果、6 つのタイプの誤用がみられた。その内、「言い換え」と「軽動詞の誤用」が突出しており、次に「母語転移」、他は「動詞以外の語の使用」、「コロケーションの混同」、「名詞の類義語」だった。

学習者の母語で漢字が用いられているか否かで比較対照した研究は、主に心理言語学的見地から漢語へのアクセス経路を調査したものが多く、第二言語習得の立場からのものは管見の限りない。母語で漢字を用いる学習者が漢語の語彙習得に有利であろうことは、経験的に言われているが、実際にデータに基づいた調査分析はなされていない。

鈴木 (2009) と庵 (2010) の研究は、両者ともスル動詞のみを対象としている。また、母語で漢字を用いているか否かで機能動詞結合の習得実態を対照分析した先行研究は見られない。本研究は、漢字を用いる中国語を母語とする⁴日本語学習者と母語で漢字を用

いない学習者が書いた作文を対象に、スル動詞だけでなくそれ以外の全ての機能動詞と事態性名詞の結合における習得について調査研究する。

3. 調査

本研究では学習者が作成した作文における機能動詞結合の産出を対象とし、調査分析を行う。なぜ、理解ではなく産出を対象とするのかということ、機能動詞結合は語同士の慣用的結び付きであることからコロケーションの一種と考えられるが、学習者にとってコロケーションで問題となるのは産出であり、理解は問題がないとされるからである(Nesselhauf, 2003; Laufer & Girsai, 2008)。そこから、L2のコロケーション能力を調査した研究の多くは、L2のコロケーションの理解知識ではなく産出知識を調査している(Bahns & Eldaw, 1993; Nesselhauf, 2003; Siyanova & Schmitt, 2008)。

「コロケーションの性質上 (ex. 非常に明瞭)、学習者にとって理解は普通問題がないので、学習者の問題の所在は、コロケーション産出を分析することにある。」

(Nesselhauf, 2003; 223-4)

本調査では、機能動詞は、スル動詞と支援動詞から構成されるものとする。スル動詞は、「攻撃する」「実施する」のスルであり、支援動詞は「誘いをかける」「連絡をとる」の「かける」「とる」など、スル以外の機能動詞のすべてを含む。事態性名詞とスル動詞の結合を「スル結合」(ex. 散歩(を)する)、事態性名詞と支援動詞との結合を「支援動詞結合」(ex. 影響を受ける)とする。

3.1 課題

母語で漢字を使用する学習者は語彙習得だけでなく、機能動詞結合でも有利なのだろうか。機能動詞結合を構成する事態性名詞には日中で共通する漢語が多く、CLJは、母語の漢語知識を利用して機能動詞結合を産出使用すると思われる。したがって、CLJは非漢字学習者と比べ、機能動詞結合の産出量も多いことが予想される。また、機能動詞結合に用いる事態性名詞の語種も、CLJではカタカナ語や和語と比べ漢語の占める割合が高いのではないだろうか。そして、用いられる漢語も、CLJは非漢字学習者よりも難度の高い語を用いるであろうと思われる。また、漢語の事態性名詞はサ変動詞と呼ばれるように、スルと結び付けて動詞化するものがほとんどであるから、CLJは、非漢字学習者に比べ、機能動詞結合の中でスル動詞を用いる割合が高いのではないだろうか。CLJは、このように母語知識を利用するので、非漢字学習者に比べ機能動詞結合の習得には有利だが、一方、日本語にない母語の漢字を用いることもあったり、日中で漢語の意味のズレがあることなどから、正用も多いが、誤用も多いのではないだろうか。

本研究は、以上の観点から次の仮説をたて、学習者の作文を調査分析し、それを通じ

て、母語での漢語使用の有無が機能動詞結合習得に影響を与えるか否かを検証する。

仮説1 CLJは、非漢字学習者より機能動詞結合を多用する。

仮説2 CLJは、機能動詞結合の運用において、非漢字学習者より正用も多いが誤用も多い。

仮説3 CLJと非漢字学習者では用いる機能動詞結合の性質に異なりがある。

a : CLJは、非漢字学習者と比べ事態性名詞に漢語の使用割合が高く、外来語の使用割合が少ない。

b : CLJは、非漢字学習者よりも難度の高い語を事態性名詞に使用する。

c : CLJは、非漢字学習者と比べ、産出使用される機能動詞の中でスル動詞の占める割合が高い。

学習者がどのような誤用を犯すかは、習得促進の上で重要である。CLJが母語知識を利用して機能動詞結合を使用するなら、非漢字学習者にはない独自の誤用が見られるものと思われる。一方、CLJと非漢字学習者は、同じ日本語学習者の立場で機能動詞結合を用いるので、共通した誤用も見られると思われる。そこで、上記3つの仮説に加え、どのような誤用がCLJ特有の誤用で、どのような誤用がCLJ、非漢字学習者に共通してみられるのかも明らかにしたい。

3.2 調査方法

調査対象は日本語学習歴10~18か月の中級学習者で、CLJ91名の作文136(平均文字数485字)、非漢字学習者についてはフランス語、カンボジア語など12カ国語を母語とする112名の作文136(平均文字数561字)を調査した⁵。作文データは、オンライン上で公開されている次の3つのコーパスを用いた。

国立国語研究所：「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース オンライン版」／東京外国語大学：「日本語学習者言語コーパス」／華東法政大学：「華東法政大学作文コーパス」

語彙の偏りが出ないように、作文テーマは「国の行事」「私の好きな○○」「たばこについてのあなたの意見」など多分野にわたるようにした。

<機能動詞結合の判別>

名詞と動詞の組み合わせが機能動詞結合か、それ以外の一般的な名詞と動詞の結び付きであるのかの判別は、次の藤井・上垣(2008)に基づいた判別テストを適用し、それに合格したものを機能動詞結合とした。

表1 機能動詞抽出判別テスト

1 機能動詞「する」が直接(「を」なしで)サ変動詞を構成するか

例：連絡をとる→連絡する

する→合格

2 目的語名詞を修飾する形容詞が、動詞句を修飾する副詞に言い換え可能か	
例：長期の休養を命じた→*長期に休養を命じた	機能動詞結合ではない
激しい攻撃をかける→激しく攻撃をかける	<u>言い換え可能→合格</u>
3 目的語名詞句を「何を」で問う疑問文が自然か	
例：Q: *何をとったの? A: 連絡をとったの	<u>疑問文が自然でない→合格</u>
1、2、3 すべて合格または1は不可で2、3合格	⇒機能動詞結合
上記以外	⇒非機能動詞結合

<正誤判定>

分析範囲と正誤判定基準は以下のとおりである。

分析範囲： (修飾語句) + 事態性名詞 + (助詞) + 機能動詞

ex. 部屋の 掃除 を する

機能動詞結合は、コロケーションの一種ではあるが、事態性名詞と動詞の結び付きであるため、特殊な性質を有しているため、語の枠にとどまらず、構文をも問題とせざるを得ない。即ち、先行研究のところで述べたように、動詞ではなく、事態性名詞が項構造を規定し、機能動詞と項を共有しているため、分析範囲にも修飾語句を含めた。

本研究では、以下にあてはまる機能動詞結合を誤用とした。[A] は機能動詞結合の形式上の誤りであり、[B] は形式上は正しいが意味・用法上で誤りがあるものである。

[A] 日本語には存在しない事態性名詞と機能動詞の組み合わせ

ex. *《アルバイトをすれば》いろいろな社会経験が取れます。

(社会経験ができます)

(《 》は筆者付加：()内は下線部に対応する適切な日本語)

この中には、次のような機能動詞の欠如も含むこととする。

ex. *禁煙の法律化ように頑張るべきだ (法律化する) ←スルの欠如

[B] 事態性名詞と機能動詞の組み合わせは日本語に存在するものだが、次の点で不適切であるもの

(1) 文法的誤用

文脈から判断してその動詞と名詞のペアを用いること自体は適切であるが、ヴォイス、助詞、修飾の仕方などに誤りがあるものである。

ex. *蒸発をする：「を」を取れないスル結合への「を」の過剰使用

*英語を勉強をする：二重ヲ格制約違反

*英語の勉強する：一語の動詞「勉強する」への連体修飾

但し、上記以外の機能動詞結合と関わりのない動詞の活用、助詞、表記の誤用などは対象外とした。

(2) 意味上の誤用

文脈から判断して、その事態性名詞と機能動詞のペアを用いること自体が不適切

であり、他のペアを用いるべきであるもの。

ex.*《タバコを》吸う人が吸わない人に、影響させるので、(影響を与える)

上記基準に基づき、筆者と日本語教師1名の2人で、抽出された機能動詞結合の40%について正誤判定を行った。コーエンのカップ係数を求めた結果、 $k = .617$ で実質的に一致しているとみなされることが確認されたので、残りのデータについては筆者が判定した。

3.3 結果

CLJ と非漢字学習者の作文をそれぞれ分析した結果を表2にまとめた。

(1) 機能動詞結合数

作文で使用された機能動詞結合の延べ数は、CLJ 776、非漢字学習者 489 だった。CLJ と非漢字学習者とで産出された機能動詞結合数に違いがあるかを見た。作文数はともに136で違いはないが、作文文字数が機能動詞結合産出に影響を与えた可能性があるため、作文で用いられた機能動詞結合数と文字数を従属変数として判別分析を行った。その結果、機能動詞結合に関して $F = 32.635$ 、第1自由度 = 1、第2自由度 = 270、 $p = .00 < .01$ で、著しい差がみられた。

(2) 正用と誤用

CLJ の使用した機能動詞結合の内、正用は631、誤用は145、非漢字学習者は、正用が375で、誤用が114だった。作文で用いられた機能動詞結合の数を従属変数として、CLJ と非漢字学習者とで正用、誤用それぞれに違いがあるかを見た。正用も誤用もコルゴモロフ・スミルノフ検定で正規分布していなかったため、ウィルコクソンの順位和検定を行った。その結果、正用は $z = -5.698$ 、 $p < .01$ 、誤用は $z = -2.874$ 、 $P < .01$ で、両方ともに有意差があった。

(3) 機能動詞結合の性質

a: CLJ であるか非漢字学習者であるかで、用いる事態性名詞の語種に違いがあるかを見るために、漢語⁷、和語、外来語、混種語の4つに分けて分析した。CLJ は、延べ数で漢語 686、和語 30、外来語 53、混種語 7 を事態性名詞に用いており、非漢字学習者は、それぞれ 435、23、23、7 だった(表3)。 χ^2 検定を行った結果、 $\chi^2 (3, N = 1265)$

表2 作文分析結果

		CLJ	非漢字
	学習者数	91 人	112 人
	作文数	136	136
	平均文字数	485	561
機能動詞結合数	延べ	776	489
	異なり	357	242
正誤割合(延べ数)	正用数 (正用割合)	631 (81.3%)	375 (76.7%)
	誤用数 (誤用割合)	145 (18.7%)	114 (23.3%)

表3 事態性名詞の語種(延べ数)

	漢語	和語	外来語	混種語	合計
CLJ	686	30	53	7	776
非漢字	435	23	23	7	488 ⁶
合計	1121	53	76	14	1264

= 3.539, $p > .05$ で有意差はなかった。

b: CLJ、非漢字学習者それぞれが用いた事態性名詞の難易度に違いがあるかを見るために、旧日本語能力試験の「出題基準」(国際交流基金、1994)に基づいて、それらの事態性名詞を1級、2級、3級、4級、級外、「日本語の語ではないもの」に6分類し比較した⁸(表4)。その結果について χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2(5, N=1265) = 15.542$ 、 $p > .05$ で有意差はなかった。

表4 事態性名詞の難易度比較(延べ数)

	1級	2級	3級	4級	級外	非日本語
CLJ	83	334	155	95	96	13
非漢字	63	204	93	87	38	4

表5 機能動詞の種類(延べ数)

	スル	支援	欠如	合計
CLJ	683	76	17	776
非漢字	398	90	1	489
合計	1081	166	18	1265

c: 次に、CLJと非漢字学習者が、作文の中で用いた機能動詞結合全体の中で、スル動詞と支援動詞の比率に違いがあるか調べた。CLJはスル動詞を683、支援動詞を76用いていたのに対し、非漢字学習者はそれぞれ398、90だった(表5)。 χ^2 検定を行った結果、 $\chi^2(2, N=1265) = 26.808$ 、 $p < .01$ で著しい有意差が見られた。

以上の結果を、本研究の仮説との関連でまとめると、CLJと非漢字学習者で違いがあったのは、機能動詞結合の使用延べ数、正用数と誤用数、及び用いた機能動詞の種類だった。CLJは、非漢字学習者に比べて機能動詞結合を著しく多く用い、正用も多かったが、誤用も多く、支援動詞よりもスル動詞を多用していた。したがって、仮説1、2と3cは支持された。一方、事態性名詞の語種と難易度別の使用割合は、CLJと非漢字学習者で差が見られず、CLJは非漢字学習者と比べ事態性名詞に漢語の使用割合が高く外来語の使用が少ないとした仮説3a、及び、CLJは非漢字学習者よりも難度の高い語を事態性名詞に使用するとした仮説3bは支持されなかった。

4. 考察

4.1 CLJの機能動詞結合使用数が著しく多かった理由

作文の平均文字数を見ると、CLJは485、非漢字学習者は561とCLJの方が76字少ないにも関わらず、機能動詞結合の使用延べ数は、CLJの方が著しく多かった。また、調査対象とした作文数はCLJも非漢字学習者も136で同じだったが、非漢字学習者では、全く機能動詞結合を使用していない作文が15あったが、CLJでは1作文のみだった。これは、機能動詞結合を構成する事態性名詞には漢語が多いので、CLJに有利であるためと考えられるが、このことは、今回の調査結果から次のように裏付けられる。

第1に、CLJの作文で、日中同形同義漢語が多用されていたことである。CLJの使用した漢語の事態性名詞を、文化庁(1978)に基づいて、S(Same)、O(Overlap)、D(Different)、

N (Nothing) の4つに分類した。分類には、講談社の日中辞典、中日辞典を参照した。

S : 日中両国における意味が同じか、または極めて近いもの

O : 日中両国における意味が一部重なっているが、両者の間にずれがあるもの

D : 日中両国における意味が著しく異なるもの

N : 日本語の漢語と同じ漢語が中国語に存在しない、または中国語と同じ漢語が日本語に存在しないもの

表 6 CLJ 使用の漢語事態性名詞の日中対照分類

	S	O	D	N	計
正用	400	20	58	74	552
誤用	96	5	9	24	134
計	496	25	67	98	686

表 6 にその結果をまとめた。S は 496 で漢語総数 686 の内 72.3%、漢語以外を含めた総事態性名詞数 776 の中でも 63.9%と、非常に高い割合を占めている。

第 2 に、CLJ が L1 漢語知識を利用して機能動詞結合を産出していることは、日本語にない漢語 (N) を多用していることから見てとれる。CLJ の作文には、13 の日本語にはない漢語が機能動詞と結びつけられていたが、以下に示すようにそれらはいずれも中国語を借用したものだった。

*滅滅する / *暢談する / *儲金する / *遊行をおこなう / *表演をする /
 *注重する / *対歌する / *接受する / *紹介する (2) / *措施をつかう /
 *思念する / *投江自殺する

それに対し、非漢字学習者で事態性名詞でないものを機能動詞と結び付けていたのは、次の 4 つだけだった。

*障する / *ストレス解消する / *手で書くことをする / *おいていする

「*おいてい」が何を意味するのか、文脈からは判別できなかったが、L1 語の借用の可能性が考えられるのは、この 1 語だけだった。

4.2 事態性名詞の語種と難易度に差異が見られなかったこと

CLJ の使用した機能動詞結合数は、非漢字学習者と比べ著しく多かったが、用いた事態性名詞の語種と難易度の比率に違いはなかった。CLJ は非漢字学習者よりも外来語の使用比率が少なく、難度の高い漢語を多く使用しているわけではないし、また、非漢字学習者が CLJ より漢語を用いる比率が少ないわけでも、難度の低い語に片寄った語の使用をしているわけでもなかった。

今回、CLJ の外来語の使用割合は、若干だが、非漢字学習者と比べて多いぐらいだった。それは作文のテーマと関係があると思われる。調査に用いた作文のうち 20 は「インターネットと私の生活」というテーマで書かれたもので、「コンピューター」「ウイルス」「ダウンロード」というネット用語が数多く出てきていた。これからますます IT 化が進むとともに、このようなカタカナ語が、CLJ であるか非漢字学習者であるかを問わず数

多く用いられていくことと思われる。

非漢字学習者が CLJ に比べ漢語を用いる比率が変わらず、また難度の低い語に片寄った語の使用をしているわけでもなかったのは、なぜだろうか。非漢字学習者が用いていた事態性名詞の表記を見ると 漢字表記すべき語 458 のうちひらがなは 207、漢字は 251 で、45.2%をひらがな表記していた。

- ex. ・《墓参りで》ざっそをじょそうします。 (雑草を除草します)
・《たばこは》からだにわるいえいきょうをあたえる (悪い影響を与える)

漢字の最大の特徴は表意文字であることだが、非漢字学習者はひらがな、カタカナなどの表音文字と区別せずに漢語の語形式を学習している可能性がある。そのため、漢語であるか、和語、カタカナ語であるか、難度が高いかどうかをあまり区別せず、語彙を習得しているのかもしれない。

4.3 CLJ がスル動詞を多用していたのはなぜか

CLJ が用いていた機能動詞のうち支援動詞は、9.8%だったが、非漢字学習者は 18.4%と支援動詞を倍近く多く用いていた。これは先に述べたように CLJ が母語知識を利用して母語の漢語を機能動詞結合の事態性名詞として用いようとするため、スル動詞を多用することになるのだと考えられる。

母語の借用語についての研究では、Moravcsik (1975) と Muysken (2000) がある。Moravcsik によると、動詞の意味を持つ語彙アイテムは動詞として目標言語に借用されることはなく、ある言語から他の言語に転移する場合は、最初は名詞として借用されるので、ターゲット言語で動詞として処理するためには、ある種の動詞化が要求される。Muysken は、動詞の借用方法の一つとして、“Do ストラテジー”をあげている。日本語では、機能動詞スルを借用事態性名詞に結合させて動詞化する方法に相当するので、日本語の場合を「スル・ストラテジー」とする。本調査で CLJ がスル・ストラテジーを用いられたと見られるのは、次のようなものである。

- ex. *料理を紹介するは必要です。 (紹介する)
*犯罪の行為と言う言い方は接受できますか。 (受け入れられます)
*楚国は・・・とうとう滅滅してしまいました。 (滅亡して)

一方、非漢字学習者が母語借用のためにスルを用いた事例は、本調査では見られなかった。非漢字学習者の場合、母語の単語をそのまま日本語に持ち込むことは困難であると思われる。もちろん、非漢字学習者も、ある事態性名詞を文中で使用したいと思っても、それに接続する適切な機能動詞についての知識がない場合、スル・ストラテジーを用いないわけではない。しかし、本調査では見られたのは、母語を借用するためではなかった。

- ex. *うるさい音楽と叫び声と冗談をするなど・・・ (冗談を言う)

- *父が一人で探しする (父が一人で探す)
- *しょうらいのほうしんをすることです。 (将来の方針を立てる)

CLJ の場合は、日本語に母語と共通する漢語事態性名詞が多いので、機能動詞結合を用いる際、動詞と切り離して名詞だけを取りあげている可能性がある。しかし、非漢字学習者は、動詞と切り離して事態性名詞を取り扱うのではなく、「電話をかける」「計画を立てる」など名詞と動詞をセットにして、コロケーションとして習得しているため、支援動詞の使用が比較的多いのではないだろうか。

4.4 誤用：共通するものとししないもの

CLJ は、母語知識を活用して正用数も多かったが、誤用数も多かった。CLJ と非漢字学習者の誤用内容はどのようなのだろうか。それぞれの誤用を要因別に分類し、その結果を表7にまとめた。

表7 誤用要因内訳

	A 日本語にない組み合わせ			B 日本語にある組み合わせだが不適切					合計
				文法上の誤り			意味上の誤り		
	スル動詞 使用	支援動詞 使用	機能動詞 欠如	修飾	ヴォイス	その他	動詞	名詞	
CLJ	33	34	21	12	10	4	10	23	147
非漢字	31	38	1	11	5	2	1	25	114

注) 機能動詞結合の中には複数の誤用要因を持つものがある。

CLJ と非漢字学習者の誤用で共通していたのは、第1に、両者とも日本語にない名詞と動詞の組合せによる誤用が最も多いことである。CLJ は誤用総数 147 のうち 88、非漢字圏は 114 の内 70 と半数以上を占めていた。具体的にどのような誤用があったか見ていくと、まず支援動詞を用いた例は次のようであった。

- ex. CLJ : *いいアドバイスをあげて (いいアドバイスをして)
- *私の不注意である失敗を起こしました。 (失敗しました)
- 非漢字 : *1つの承諾を作りました。 (承諾しました)
- *がいこくからえんじょをもらったほうがいいです。 (援助を受けた)

このような不適切な名詞と動詞の組み合わせがどのようにして生み出されるのかについては、2点考えられる。まず1点目として、動詞を選択する際、支援動詞は意味で選び、スル動詞はスル・ストラテジーを用いていることがあげられる。支援動詞の場合、学習者は、上例のように文脈から判断して意味的に妥当と思われる動詞を選択して事態性名詞に結びつけている。しかし、機能動詞結合の場合、名詞と動詞の組み合わせには慣用的な制約があるが、そのことを考慮していないために誤用が生じている。

一方、スル動詞を用いた場合を見ると、次のようなものがあつた。

ex. CLJ : *今度もっと頑張りしようと思っています。 (頑張ろう)

*ちゃんと顔を洗ったり、ヘアスタイルをしたり・・・ (髪を整えたり)

*男の人たちは女の人たちとおどって、対歌します。(デュエットします)

非漢字 : *父が一人で探しする (父が一人で探す)

*彼女はいつも笑顔をしていて・・・ (彼女はいつも笑っている)

学習者は、実質動詞があるのでそれを用いるべきなのに、わざわざ連用形名詞を作り出したり(「頑張り」「探し」、事態性名詞ではないものに機能動詞を結合させて動詞化したり(「ヘアスタイル」「笑顔」、日本語にない母語を使用したり(「対歌」)する時にスル動詞を用いている。

支援動詞の場合、学習者は、それが本来動詞として持っている「やりもらい」、「コトの成立、消滅」などの意味に基づいて動詞を選択し、事態性名詞に結びつけている。一方、スル動詞の場合は、村木(1991)も述べているように、意味的に空疎な動詞なので、結びつける名詞の意味を考慮せず、“自由に”結合している。学習者は、表現しようと意図する内容を持った事態性名詞を文中で用いたいが、一緒に用いる動詞が分からない時、それに適すると思われる“実質動詞”が見つかった場合は、それを「支援動詞」として用いるが、みつからない場合はスル・ストラテジーを取るものと思われる。

不適切な名詞と動詞の組み合わせが生み出される2つ目の理由として、母語の影響がある。筆者の語学力の限界で、英語母語話者のものしか分析できなかったが、CLJも英語母語話者もともに、母語の事態性名詞と機能動詞の組み合わせを直接持ち込み、日本語に逐語訳したと思われる誤用がみられた。

ex. CL : *まわりの人に危害を持ってくる (“带来危害”の逐語訳)

非漢字 : *人々にも害をしています。 (“do harm to ~”の逐語訳)

下の例は、英語母語話者のものだが、英語には機能動詞に相当する have、take、do、make などの軽動詞があり、その直訳を機能動詞にあてはめたものと思われる。

上述のいずれの場合も、不適切な名詞と動詞の組み合わせが生じた背景には、機能動詞結合の制約における学習者の無自覚がある。事態性名詞と機能動詞の結びつきは、意味的に妥当と思えても、またスル動詞が意味的に空疎であっても、組み合わせには慣用性があり制約があるということに“気づき”がない。Schmidt(1990)は「気づき仮説」(noticing hypothesis)を提唱し、L2 学習においては、学習者の注意が目標言語項目に向けられることが不可欠であると述べている。

CLJ と非漢字学習者に共通した誤用の第2は、次のような機能動詞結合に対する修飾の誤りである。

ex. CLJ : *インターネットは・・・よく処理しさえすれば、*安全の確保して大きい収穫がある。 (安全を確保して)

*日本語会話の練習しながら、話の技巧も習います

(「会話を練習しながら」または「会話の練習をしながら」)

*おじいさんは長生きで、幸福な生活していきますよ。

(幸福に生活して)

非漢字: *クリスマスのりょうりします (クリスマスの料理をします)

*個人的な世話しなければ・・・ (個人的な世話をしなければ・・・)

事態性名詞とスルは、“VN する”と「を」なしで結び付いた場合、一語で動詞として機能するにもかかわらず、事態性名詞部分だけを切り離して名詞として扱い、ナ形容詞や「N の」(N: 名詞)で連体修飾している。上記の例を含めて、CLJ には 12、非漢字学習者には 11 の修飾の誤りがあった⁹が、これは、学習者が機能動詞結合に用いられた事態性名詞が名詞であるのか、動詞であるのかをはっきりと認識していないことを示している。これも第 1 にあげた誤用の場合と同様、機能動詞結合そのものについて無自覚であることによって引き起こされた誤用であると考えられる。

一方、非漢字学習者には見られず CLJ だけに見られた誤用があった。第 1 は、4.1 で述べた日本語にない事態性名詞の使用で、全て母語をそのまま借用していた。

ex. *一家は遅くまで暢談したりします。 (語り明かします)

*天安門広場で閱兵儀式と遊行をおこないました。 (パレードしました)

非漢字学習者の場合、日本語では名詞でないものと機能動詞を結びつけていたのは、同じく 4.1 で紹介した 4 例だけで、母語の借用といえるものはなかった。母語の借用は、日本語と中国語が漢語を共有することに起因する CLJ 特有の傾向と考えられる。

CLJ に片寄って見られた誤用の第 2 は、機能動詞の欠如で、CLJ では 21 例だったが、非漢字学習者は 1 例だけだった。本調査では機能動詞の欠如は 2 種類見られ、a 事態性名詞に助動詞を接続して直接活用させ、動詞のように扱っているものと、b 機能動詞を用いるべきところで用いていないものがあった。

a の事態性名詞に直接助動詞を接続し、動詞のように活用させているものは、CLJ では 7 例¹⁰あったが、非漢字学習者には全く見られなかった。

ex. ・個人の権利は・・・禁止られるべきです。 (禁止される)

・コンピューターのシステムを破壊られで、・・・ (破壊されて)

日本語では、「禁止」「破壊」などの漢語は名詞に分類されるが、中国語では動詞として用いられるので、日本語でも動詞扱いして、直接活用させてしまったものと思われる¹¹。

b の機能動詞を用いるべきところで用いていない例は、CLJ で 14 例、非漢字学習者で 1 例あった。次の例は、CLJ が機能動詞を欠如させたものである。

ex. *私の気持ちは緊張で、怖いです。 (緊張して)

*私は自立です。 (自立しています)

*メロディーは難し・・・ので、時々放棄だと思っています。 (放棄しよう)

*アニメ関係の仕事をする実現ために、日本語は頑張る (実現する)

石堅・王建康 (1987) は、中国語を母語とする日本語学習者は、日中の品詞のズレによって誤用を犯しやすいと述べている。例として「緊張」をあげ、「緊張」は日本語では動詞であるのに、中国語では一般に形容詞として使われるために、日本語でも形容詞として使ってしまうことが多いとしている。非漢字学習者で機能動詞を欠落させていたのは、次の1例だけだったことから、やはりbの誤用も母語と日本語の漢語が共通するために生じるCLJに片寄った傾向であると言える。

ex. *へんそうない人を立腹させます。 (変装していない人)

第3に、CLJと非漢字学習者とで違いがみられたのは、ヴォイスの誤用である。CLJの場合、10例あったヴォイスの誤用は、すべて心理表現だった。8例は「感動する」、2例は「感心する」で、いずれも受け身で用いられていた。

ex. *このドラマは悲劇ですが、ほんとに感動されました。 (感動しました)

*話す発音がきれいし、クリアし、感心られました。 (感心しました)

誤用とは言えないが、ほかに次のような例があった。

ex. ?彼女の勇氣と品質に非常に感動させられる。 (感動する)

?これはわたしは一番感動させられたところである。 (感動した)

これらは使役受身を使っているが、日本語としては「感動する」を使った方が自然である。石堅・王建康 (1987) は、「感動」は、中国語では自他両用動詞、日本語では自動詞であり、「このような語は中国語では受動態で用いられることが多いので、「中国人学習者は日本語でもそのまま『感動される』という形を作ってしまう」と述べている。

一方、非漢字学習者のヴォイスの誤用5例のうち3つは自他両用の事態性名詞を用いたものだった。

ex. *かんそうされたえだをさがすためにしんりんへ行きました。 (乾燥した)

*国をふっきゅうさせる (復旧する)

*かんがいがふっこうさせられて (復興して)

上記のような自他両用事態性名詞は、次のように自動詞にも他動詞にも用いられる。

ex. ・冬は空気が乾燥する。 (自動詞用法)

・ふとんを干して乾燥する (他動詞用法)

影山 (1996) によると、「サ変動詞は派生接辞が付かないから、ヴォイスの転換を行うにしても、形態的な手がかりはない」ので、自他の判別に際しては、意味的な性質にしか頼るものがない。そのため、日本語学習者には、ただでさえ漢語事態性名詞の自他の判別は難しいが、上記のような自他両用の場合は、さらに難解度が増すと思われる。しかし、同一の事態性名詞が自動詞と他動詞両方に用いられることがあることを認識している非漢字学習者はほとんどいないと思われる。

なお、表7で意味上の誤用とした「動詞」の誤用と言うのは、事態性名詞と機能動詞の組合せは日本語にあるものだが、文脈から判断してその名詞を用いること自体は正し

いが、動詞が不適切で他の機能動詞を用いるべきものであり、次のような例が見られた。

ex. *一人でたばこを吸ってほかの人を影響しないのははまだ。

(他の人に影響を及ぼさなければ自由だ)

*世界は一人の世界ではなく、自本の感覚が注意するばかりでなく、みんなの
ことと生存環境のことを注意しなければなりません。(注意を向ける)

また、表7で意味上の誤用としたものの内、「名詞」の誤用としたのは次のようなもので、「参加」「発行」という名詞を用いるのは文脈上不適切である。

ex. CLJ : *毎年9月も試験に参加しました。(試験を受けました)

非漢字 : *そのような法律を*発行するのはだめなこと・・・(法律を作る)

このような名詞の語選択の誤りは、機能動詞結合特有の誤用とは言えないが、機能動詞が全体としていくつ使用されていたかを見るために総数には入れた。しかし、正用とするわけにはいかないので誤用の中を含めた。

5. まとめと今後の課題

本調査の結果、CLJは非漢字学習者に比べ、著しく多くの機能動詞結合を産出使用しており、母語で漢字を使用する学習者は、語彙だけでなく機能動詞結合の習得でも有利だと考えられる。しかし、母語知識を利用できることがCLJにはプラスにもマイナスにも働き、正用も多いが誤用も多かった。

CLJと非漢字学習者では、誤用の数だけでなく、誤用の性質も異なるため、それぞれにあった機能動詞結合の学習が必要である。CLJは母語知識に依存しすぎるため、日本語にない母語語彙の借用、機能動詞を欠如した事態性名詞の直接活用など、特有の誤用が生じていた。一方、非漢字学習者の場合、全く機能動詞結合を用いていない作文が15もあるなど、機能動詞結合の使用そのものが少なすぎ、表現意図を十分に表すことは困難である。そこで、CLJには、漢語事態性名詞の意味や品詞の日中での異なりなど、母語との違いに対する“気づき”を促す指導が有効であり、一方、非漢字学習者には、多くの事態性名詞を機能動詞と一緒に提示し、機能動詞結合の習得運用を促す必要がある。

また、CLJ、非漢字学習者両方に必要なことは、機能動詞結合への“気づき”を促す明示的学習を行うことである。CLJの場合も非漢字学習者の場合も、誤用の多くは機能動詞結合というものに無自覚であることから生じていたが、現在、日本語教育の現場で機能動詞結合を取り上げて学習対象とすることはない。「ヘア・スタイル」「頑張り」など事態性名詞でないものに機能動詞を結びつけて用いるスルの過剰使用は、事態性名詞と機能動詞の組み合わせには慣用性があるということに無自覚であるために生じている。また、「*個人的な世話する」のような修飾の誤用は、“VNする”と「を」なしで結び付いた場合と、「を」がついた場合では修飾の仕方が異なることについての明示的知識が欠如しているためであると思われる。

今回の調査では、CLJ も非漢字学習者も機能動詞結合の産出において 80%前後の高い正用率を示した。しかし、学習者は、自信のない機能動詞結合の使用を回避した可能性がある。作文では使用回避を見ることができないので、タスクなどで機能動詞結合の産出を強制的に促す実験による調査を行うことを今後の課題としたい。また、さまざまな言語を持つ 12 か国の学習者を「非漢字学習者」とひとくくりに論じてしまったが、各言語で機能動詞結合がどのように用いられているかとの関係でも分析を深めたい。

謝辞：この研究は、国立国語研究所日本語教育基盤情報センター「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」、華東法政大学「華東法政大学作文コーパス」、東京外国語大学「日本語学習者言語コーパス」を利用して行われたものです。これらコーパスを作成、公開くださった方々に深く感謝いたします。

註

¹ 誤用を示す。

² 動名詞。本研究の事態性名詞に相当する。

³ do、make、take など、意味的にあまり重要ではない動詞。本研究での機能動詞に相当する。

⁴ 漢字を母語に取り入れた言語としては、韓国語、ベトナム語もあるが、本研究では、典型的語として、中国語を取り上げた。

⁵ 非漢字学習者の作文収集国内訳：インド (13)、フィンランド (17)、オーストリア (1)、ベルギー (4)、フランス (22)、ドイツ (8)、ブラジル (11)、カンボジア (13)、モンゴル (5) ポーランド (8)、スリランカ (8)、アメリカ (2) () 内は執筆者数

⁶ 意味を判別できなかった非漢字圏の「*おいていする」は、分類から除いた。

⁷ 作文の中でひらがな表記してあるものでも、本来漢字で表記されるべきものは漢語に含めた。

⁸ 分類した語は、漢語だけではなく、和語、外来語、混種語も含まれる。

⁹ CLJ：*悪い影響する／*宮廷貴族の生活する／*私の失敗したこと／*いろいろな失敗したこと (2) ／*自分の努力をする／*本の発売する／*便利な利用する／*どんな流行したか／*真面目な練習したり

非漢字学習者：*早いよやくする／*日本語の勉強する／*社会の準備する／*いろいろなりようする／*たばこのはんたいする (2) ／*どくりつのきねんをする

¹⁰ 本文以外の 5 例：*浄化れる／*描写られ／*応用られる／*感心られる／*重視られる

¹¹ 註 10 の「感心」は中国語にない語であるので、母語の影響で動詞扱いしたとは言えない。

参考文献

相原茂(編) (2010) 『中日辞典第三版』講談社

相原茂(編) (2006) 『日中辞典』講談社

庵功雄 (2010) 「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因—非対格自動詞の場合を中心に

- 一)『日本語教育』146、174-181.
- 石堅・王建康 (1987)「日中同形語における文法的ズレ」『日本語と中国語の対照研究別冊—日文中訳の諸問題—』日中語対照研究会、56-82.
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- 国際交流基金 (1994)『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』凡人社
- 鈴木綾乃 (2009)「上級日本語学習者の動詞のコロケーションに関わる誤用—「する」を中心に—」『日本語教育学研究への展望：柏崎雅世教授退職記念論集』ひつじ書房、61-77.
- 長谷川信子 (1999)『生成日本語学入門』大修館書店
- 藤井聖子・上垣渉 (2008)「支援動詞構文における事態性名詞と動詞との項共有と連結性：『日本語コーパス』を用いた分析」日本言語学会第136回大会予稿集、432-437.
- 文化庁 (1978)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 村木新次郎 (1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 村木新次郎 (1985)「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4/1、15-27.
- Bahns, J. and Eldaw, M. (1993) Should we teach EFL student collocations? *System* 21(1),101-114.
- Grimshaw, J. and Mester, A. (1988) Light verbs and θ -Marking, *Linguistic Inquiry* 19, 205-232.
- Laufer, B. & Girsai, N. (2008) Form-focused instruction in second language vocabulary learning: A case for contrastive analysis and translation, *Applied Linguistics* 29 (4), 694-716.
- Matsumoto, Y. (1996) A Syntactic account of light verb phenomena in Japanese, *Journal of East Asian Linguistics* 5, 107-149.
- Miyakoshi, T. (2009) Investigating ESL learners'lexical collocations: the acquisition of VERB+NOUN collocations by Japanese learning of English, Ph.D., University of Hawaii.
- Moravcsik, E. (1975) Borrowed verbs. *Wiener Linguistische Gazette* 8, 3-30.
- Muysken, P. (2000) Bilingual Speech. *A Typology of Code-Mixing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nesselhauf, N. (2003) The use of collocations by advanced learners of English and some implications for teaching, *Applied Linguistics* 24 (2), 223-242.
- Schmidt, R.W. (1990) The role of consciousness in second language Learning, *Applied Linguistics* 11(2), 129-158.
- Siyanova, A. and Schmitt, N. (2008) L2 learner production and processing of collocation: A multi-study perspective, *The Canadian Modern Language Review* 64 (3), 429-458.
- 作文コーパス：
「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース オンライン版」
国立国語研究所 http://jpforlife.jp/contents_db
「華東法政大学作文コーパス」 <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~sugimura/class/corpus/zhengfa.html>
「日本語学習者言語コーパス」東京外国語大 <http://cblle.tufs.ac.jp/llc/ja/index.php?menulang=ja>

